新編水滸畫傳

二編

九

へ21
875
19

明へ遠21
帝 8755
巻 199

和漢西洋書叢

明治三十二年十月十日購求

新編水滸画傳卷之拾九

東武　高井蘭山翁　譯編

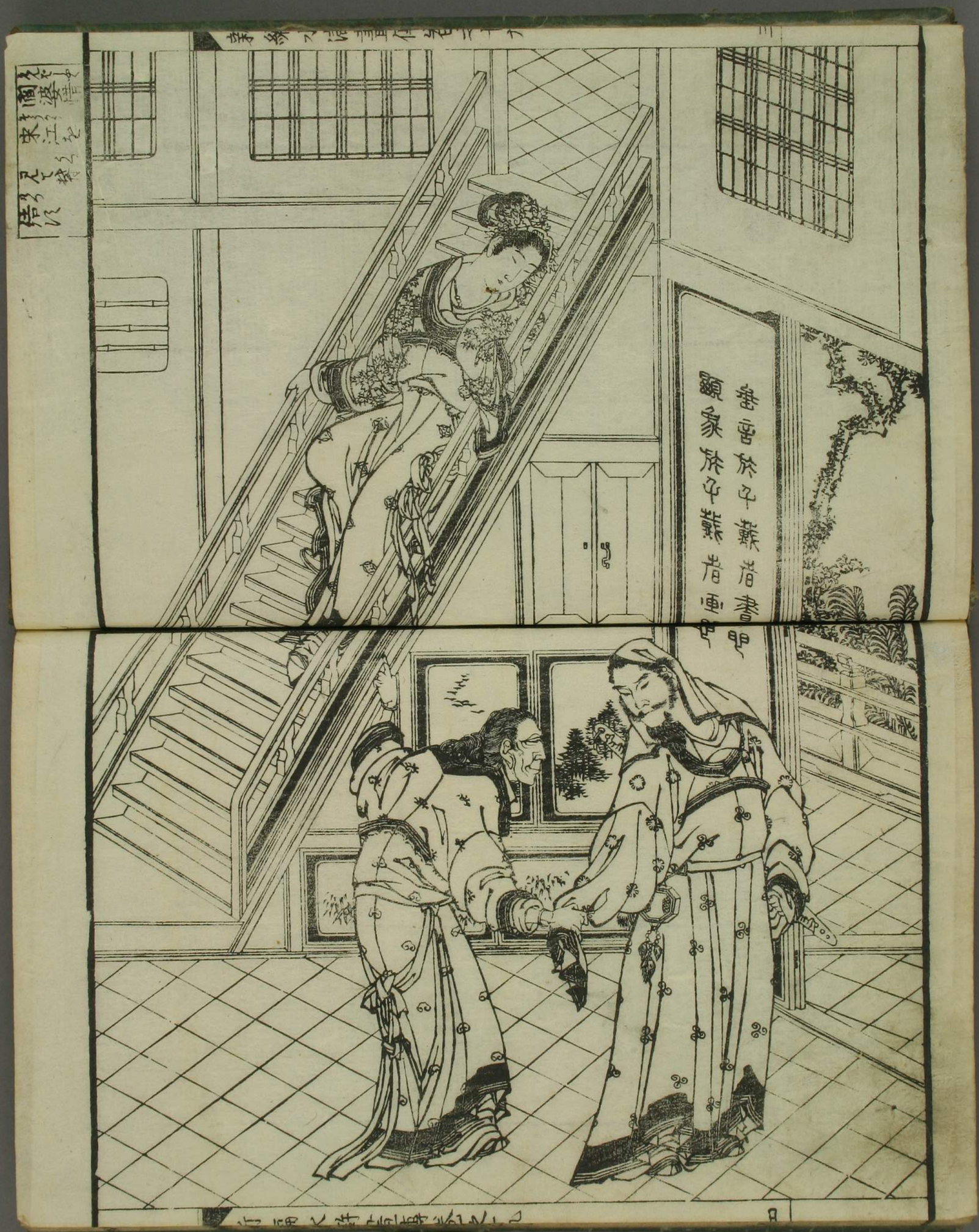
○虔婆醉て唐牛児を扶け又閻婆宋江と途中ゝ見て。ゝ掛る四名。宋江を往り。時閻婆ゝ云。押司は何四名。久〳〵我屋ゝ至りなぬや。女婆惜り。押司の心ゝ背くをめゝ。写〳〵教訓を畜ゝ。我今押司に遇ることを幸ゝ。已不得我ゝ家ゝ帰やゝ。宋江ゝ云。我今日ゝ公用忙〳〵ゝ。汝ゝ家に帰ると強〳〵吳日暇を得ず。必ず母子を訪ふべきに。今日ゝ先我を免せ。閻婆ゝ云。我女婆〳〵押司の光陰を待ゝて居ゝ。招て来ゝ。押司ゝ何四名。新疎んじ給ふや。宋江ゝ云。今日ゝ実に忙〳〵ゝ。明日ゝ必ず汝ゝ屋ゝ帰べし。閻婆ゝ云。我偶押司に遇ぬるに。如何ぞ肯て放ちやらんや。今晩ゝ除

非ふ笑を狂ひて、宋江が衣の紬を扯て。尚再三云るハ。何人か押司に詐のことを告て。彩ハ嫁んじゃなめ〳〵。我ハ母子ハ押司を憑で。今日乃生涯を饒ふて世をとをれば。豈押司のことを。笑宋江思ひすべさ。必ず外人ふ云而の儀云を伝じゃなよとをれ。乃女に過ちひて。扨て我身の上に干て。これを〻〻〻〻〻ようんづれハ。今晩ハ縊ひいう狂の幹事おり〳〵まにもわの間ありとも。笑を稼〳〵ひ。宋江ハ狂云利わると扨て思顧否られた。彼閻老婆。宋江が紬裂とも放さじ。竟に宋江を拽て。巳が家の門前ふ到て云るハ。押司巳に此まで到りあふ上ハ。宜〳〵門内ふ入ひ。宋江今ハ稼をて紬を。遂に門内ふ入て。発の上に坐〳〵られば。彼閻婆も同じく宋江が傍ふ坐して。女を呼て云るハ。汝が公婆の人来りあひ〳〵に茶を。茶の上に立て。一向張三ごとを思ひ居る知ふ。忽ち母が呼つて。公婆の人

来りあひ〳〵と云ひるを聞。必ず張三ら事をうんと思ひ。忙ざ慌て起上。樓を下り彼漏子の縫間より遠〳〵ふ。塀牆牝の下に。宋江発ふ坐して。彼婆情を思ふ。分を問〳〵て。再び床の上に却ふ。此時閻婆ハ女が樓を下んとをる。宋吉の呼るが再び又樓を上りぬると聞て。急て呼つて云るハ。汝が公婆の人来りあひ〳〵ぬるに。何ぞ樓を下りざるや。彼婆情床の上ふ若て云を人ハ見盲目ふ。自ら紙樓ふ上りべきふ。何ぞ我樓を下て迎へ。ゆうんや。閻婆ふ呼て云る。我女押司の〻〻〻〻来りあいざるを。然てがくのごとくうんん。我押司を延て樓ふ上るべし。宋江ハ今婆情が云〳〵ふ。と呼て。ふ心中抗びぞ。直ちに同〳〵んと思ひ。これを閻婆再三再に扯住ふ。已ことを。拒ず。閻婆と共ふ樓の上に登〳〵ば。閻婆乃ち宋江を拖て。房局の内ふ入。乃女に對て云るハ。押司偶来りあひ。汝ハ何ぞ形状びざるや。汝原来経京のたる

面を向ふも押司の心ふ背て。押司と惡しめまろ〳〵せ。押司遂にこれと振ひ
て。久〳〵我家ふ來りまとをりて汝者に押司と暴ひるゞ。今晩郷とかく
憐りと舍ハ何の乃理ぞや。我母と力を尽して押司と迎へ來りし汝必す
等家のことに思ふべ〳〵。婆婦これと哀母に養て云るハ。母ハ是れ孝を嘆ぜ
ものふをや我ハ何て友さとも殺さるに。彼人自ら來りぬふ。我なんぞ是と
知らんや必ずおもも怕れ申とをるん。宋江是と笑ひ〳〵。兵部とも做ぶ
して居らしゝ。閻婆別婆婦と扯延して宋江が危の側に坐せしめて云
るハ汝宜く押司と慰て淡話せよ。必ず又押司の心ふ背くことをうん。婆
婦是と聞て大ふ怒ひず別室と延て。宋江が社の遠對面に坐し。張を
低く居らしゝ。宋江もはじ〳〵張と低く。互に一向一言も云ず生れい。閻婆
此辭と見て云るハ。汝るんぞ能婦と惹とめんや。我少剌汝者

と求て來るべきふ女必ず押司に落して淡話せ。おも羞怕ることをうん。此時
宋江暗に思ひるハ我如ゞ此閻婆ふ扯住られ已ことを決すして此如ふ
來りぬ閻婆の外に出ることをゝ〳〵我好此間ふ乘じて逃回るべきものと思
案と定めるる如に。彼閻婆宋江が間んと欲する色を悟しゝ乃房間の戸と
閉して須と下し。遂に樓と下りて街の上ふ行。多く酒者と買へ。亦家に
歸やゞてこれと具へて。房間の内に運び來りる如に。宋江も婆婦と共ふ張
と低互ふ言與の色面に表れ〳〵閻婆乃ち女に對して云るハ。汝宜く
盃と舉て。押司に勧めよ。婆婦ぐ云。我今日何とやらん。身心煩ハしく快ハ。
酒と飲んと能ハず。閻婆ぐ云。汝幼に時より父母に寵愛せられて自由自
在ふ生長るゆゑ勧不勧自像自意のこと多し。這等のことハ是父母ふ對
ていふるべれども他人ふ對してハ行れざることを汝宜く心と更めて。押司と


畫面於平蘇者書明
顯象於平蘇者画中

慰めよせ婆惜を云我今日は彼うゝざる母を酒を砂まぢきふ何ぞこれを肉像自ゑといえんや我縱ひ酒を砂ずして床の上ふ歩引とも推う殺て劍を飛し我首を元者めゝんや必ず多く雲有の言を云ふとうれ閻婆これを歩笑て云るゝ押司は見風流の人物ふて汝がごとき經見ふめゝ汝縱ひ酒こを酌ずとも既を撥て疾活をもすべきとうるに却て既を低く抗びざるゝ如て云孔こを自ら盃を牝て宋江ふ勧めれゝ宋江辭をこと能ば自ら強て一盞を酌乾り。閻婆これを見て吟〻と歩笑て云るゝ。那くゝ押司ふを寛び給ふ必ず外人の云ことを聞入ゆひて我ふ母子を恨ゆふとうれ別して今日は何事もお休めゆひて一向酒をゐゝ一ゆとて言を巧うゝ及を含して再三酒を篩て宋江を勧め又婆惜ふ對して云るゝ汝ゝ何ゆゑ孩子のごとく駄りふ我が教訓に背くや寫〻婆惜が怒を息て一盃を酌んや婆惜が

云母ゝいうるとふよりて我を責めゆゑ我実に酒を飲ん色必ず盃の法を云ゆふとうれ閻婆又云汝が心色の宋押司偶来りゆゑに一盃の酒を勧めすゝ何の不可なるこゝろゝん汝迷に我云に依て押司とうるに酒を酌で心を慰めよ婆惜が云を聞て心中に思ひるゝ我ゝゝは長三ごとこを思ひぬるにいんで能宋江ふ陪して酒を酌んや強れども我り彼を碎しめずんゝ彼必ず家の内ふて我を妨るとゝゝんちされゝは先彼を酒ふ醉しめ熟〻睡しめんゝ思ふ乃盃を牝て盞の酒を砂れ。閻婆お笑て云婆惜汝ゝ心を改めるるゝ必ず慎ることをなさずして押司のゝふ従ひまゝ〻ぜよ押司も又多く酒を呑しゝ夜ゝて再ゝ何を問強れば宋江辭すること能ば一連に三又盃を砂しゝ閻婆も又数盃砂て再び樓をとりて酒を盪すゝる如に婆惜又手盞を砂れば閻婆これを見て心

中ふ怪び恐ひるゝ今宵のしらく宋江と歌しむるてあらば宋江必ず武ゐの怨を忘れて又幾ばく月日を養ふべられむ。そ内に宮〻く商議を為べきものと思ひ。又樓をとりて酒を盪て来りる処ふ宋江も婆惜も既に低て居とひとりの商婆哈〻と打笑て云るハ汝女人ハ何ぞ互に羞恥て情話もなさるゝ。押司ハ是男子のてなれば別に羞なしてもあまりに兵宮〻に閑流の情話を借しめ宋江ハ是等孫悦びず只一云も若ずして甚だ憂然迫りぬ彼婆惜も又自ら恥道我ハ兵張三がとゝそ朝夕これを思ふに汝今宵こゝに来るも我豈敢て汝と偕に樂をかさんやとて心中宋江を恐れ嫌ふて忘まし。るる処に郵城縣ふ一人の糟薑を賣ふ唐牛児と云ふ者ありるが先に宋江の恩を蒙りし事ふ宋江彼を用ひ彼又死を捨て宋江が為に力を尽しりるが此頃博奕ふ輸て柰何もすべきなく。

唐牛児緒博輸一銭貯儘宋押司本銭借ラント

宋江に本銭を借んと欲して宋江が宅ふ往しらども。宋江ハ宅にあらずとて帰られば唐牛児彼に云ふ所に来て方〻に帰る所に一人の友唐牛児ふ向て云ふ汝ハ何と辱んて。かくのごとく忙しきぞ唐牛児が云ふ我ハ是縣裡の宋押司を辱んて。彼友が云ふ我者ハ宋押司ハ閻婆ふ引れ武松を通ひぬ唐牛児が云ふ彼閻婆が女閻婆惜ハ宋押司の妾なりるが頃日張三と。私通と聞て。不義とのゝしる由宋押司聞て武松を怒りて久し彼が家ふハ往ざりるが今宵ハ必定かの閻婆に誑れてそゝ行ひしなん。我今緒博に輸て一銭の行も為ぬ。宋押司ふ本銭を借んと欲するとなれば閻婆が家に為ゝ行て本銭をも借商且相伴して義でくの酒とも殆んなの狂。そも押司の酸ぬんを待ゞ上て。恋ちに閻婆が家ふ為り門の縫間より内を窺るに。燈の光明なして。樓の上に人影

ありなれば。唐牛児ゑふをくへて。まちに樓ふ上り。乃ち宋江に見えて。態
態ふ跪ぬ宋江暗に思ひるハ。武者ひの処に来れりとて。乃ち唐牛児ふ
向て問りゝ。接拒と見て。眼交しなれど。唐牛児ふ来乗に者ゆ。ゆく
と知ぬ。別宋江ふ對して。言をばゝ云るハ。系押司を尋て。方ゝと弛る
に。押司ハ武郎ふ来て。郎安ゝと酒を砂で。嫌ゆゝや。宋江ゞ云。汝我を殺しハ。
宝て縣裡ゝ云用と中来ゝ。唐牛児ゞ云。押司何でゝゝ云れゆゝや。
と朔彼一の云用ハきゞ清息ゝ。縣相公大ひて焦燥て。待ゝびゆゝ已
に又六度許使を弛て。押司を殺しめ給ひぬ。宮ゝ急に問りゆゝ。宋江ゞ
云。汝ふ我不ふと朔の云用と云れゝ。縣をでかゝ使を弛ゆゝ上ハ一刻
も急に問ゆゝ。そゆて庭と立んゝる郎に。彼閻婆ゝれを捕住て云るハ。
押司何で遠拒の。計をなゝゆゝや。我思ゝりとゝ。武計ふ中るまゞ且宮ゝく

坐をゝゆゝて。又唐牛児ふ向て云るハ。汝ハ何ゆ我樓ふ登て。我と謝
んとするゆゝ。今武秋中ゝ。郎縣相公も已に衙門に問りゆひて。夫人とゝ酒
を砂んで。樂を偲しゆゝべきに。何の云用ゆゝて。兵顧押司と云ねゆゝや。這
等の汁ハ。ゝく三歳の孩児を欺くべし。我おゝてハ武計ハ。決して行るまじ。
唐牛児ゝ云。実に是郎相公ゝ。度ゝく使を弛ひて宋押司を殺ひめ
ゆゝ。我何で謊を云んや。閻老婆大ふ罵ゝて云。汝小人何で敢て我を欺ん
とするゆゝ。我ゆ眼ハ早ゝゝも明ゝり。先に押司汝ふ向て問りゝ。武の接拒を見て
ゆひて汝にかくのごゝ計を云しめゆゝ。汝ゝ心ゆゝ。押司問んと云
ゆふゝも。拒ゝれと諫て押司を慰むべさ郎に。郎て押司を捲く飯んと。ゝ
いんゝゆゝ。我決して汝を饒しゝ。忽ち跳起て。唐牛児ゞ面を打れば。
唐牛児ハ樓のに小坐しゝるゆゝ。遂に樓ゝ落られども。幸ひに身を傷拒ゆ

して云けるは。汝閻婆何の由縁ありて我を打や。閻婆が云汝擅に我家に来り
押司を引て回らんとするは是刑我衣飯を破る然れば我何ぞ汝を打
まじきや。汝もし声を揚ることあらば。弥痛く打べきぞ唐牛児が云汝我を
打て妨ぐるんば我汝に打かゝらんとて近く進みければ。彼閻婆酒に酔て
又唐牛児が面を続けて三拳打て門外に推出し。乃ち門を閉して。罵り歩み
怒りしければ。唐牛児大ひに怒り。門外に立住つて罵り叫て云けるは。賊老虔婆
汝よく我を打けるよな我若宋押司の事を慮ずんば汝が此屋を撤塵
に打壊て。汝が命をも害すべきものをと牙を咬で回りけり。閻婆は再び樓
に上り。宋江に対して云けるは。押司は何由縁彼小人に憐憫を加へ給ふや。
彼は是等人の是非を云て一碗の酒を貪る乞食なり。押司向後彼
を見ることなかれ。宋江は元来老実の人なれば。今閻婆が汁を着破て

れざる由縁。座を定て。只顧躊躇して居たりしが。閻婆が又宋江に
對して云けるは。押司必ず心中に。我を恨み給ふことなかれ。我は唯押司を慰
ん為の好ひ合せしことて。又女に対て云けるは。汝何由縁押司を勧めて酒
を飲ざるや。我が情に汝が友人の。動静を猜するに。久しく遇ざりし由縁。互に怨
めると見えたり。よくよく然あらば。よく歇んで。是を済り給へとて遂に盃を收
めて樓を下りければ。宋江は暗に想道。婆惜は張三と。私情を通じけると。人
皆が説しければ。我いまだ実正のことを見ざる由縁。半を信じ半は疑て事を
変せざるが。今宵心を總て婆惜が動静を伺んため。一夜は此て歇るべしと思
を定めける時に。那閻婆又樓に上て女に對して云けるは。夜も已に更るに何
由縁押司を勧めて共に歇まざるぞ。只宜しく早く歇で我心を安らしめよ。閻
婆惜答て云我が歇んとは母の干りなることにあらず。母々心を費しなりん

より。自ら樓を下りて歌へり。明日再び遇ひやうんとて遂に樓を下り燈を滅し自ら寢間に入て卧ふ。宋江は牧羊の上に坐して立るを潘婆惜定て為のごく。覺の情ふ來て後話をもかし。寫く我を待て歌しめんと思ひしに豈知らんや。婆惜は兵仙中強三ごとの慕ひる西京郎て。宋公に來りと。大ふ怒して曰ひるは宋江を者も又我を同じく休んとこそ。思へべられも我を宵は決して彼と俗に寐むまじとて。独燈の下に坐して。一向歎息ひる和に。疾もまた東うて。二更の強も寫しに。婆惜衣とも解ずして。床の上に坐卧るに。更に宋江を顧ざりれば。宋江心中に思ひるは此女伴を我を欺くこと。此に和れりや。我先に閻婆に況を知られて碎るるを。かく疲に及で。此涙疾とるべきれば出て一睡眠らむやと思ひ枕巾を除て卓の上に置。衣裙を脱て。衣架の上に架。壓衣力と招文袋を床の辺の探杆の上に掛。遂に床の上ふ坐つて。婆惜背後ふ歩卧れて。婆惜を見て冷笑ひる西京。宋江金莽同して。睡ること能はも已に三更の方側ふ卧ふる和に況の碎も全く醒て粥く。又又更の時ふ推移りて。宋江遂に起て枕巾を戴き衣裙を着し。乃ち婆惜を罵て云るは。汝婦何でかくのごく無礼をもるを。婆惜云を笑て門ごく蓋罵て云るは。汝自ら羞ともらずして我床の上に卧て。却て我を罵る。実に好笑て。宋江益怒て。婆惜を下りる和ふ。彼老婆床の内より宋江を回るを。云て云るは。押司は何の事。今又更の時ふ。疾の明るを待て。歌へ。宋江是を耳ふも。笑入も門を宅へ。私宅へと帰りる。強く縣令を。る和ふ。一盞の燈の光を。れば宋江を倚て見れば。是幼湯茶を賣る云

と云へば時分縣お小出て湯菜を買て発業しに。汝王公宋公をもて。
忽ち礼を施して云押司いかの為用ありて。朔朱明より出のみや宋江が云
我昨歩く汝を欲る為時を差へて。時分出るべ。押司已
に酒とる色みをしめ宴めく。妓るまし。碍酒二陳湯を用ひおうんや。
宋江が云二陳湯めぐ。我為ひにられを用ひて覺の上に坐しられ。王
公奴て一盞の二陳湯を捧げて宋江に与へ宋江これを用ひ忽ち思い出し。
我毎度汝者ぐ湯菜を用ひ。汝若我僕を待ざる為。我日外彼に一ツ
の棺椁を施すべと。弱しられた。未だ見を与へざるまく今朔為ひ彼に
棺椁を与へ呪しめんと思ひられば。乃王公に対して云るへ我日外汝
に棺椁を恵むべと約しられた事の忙ハしきに紛れて未だ與へざりき。
為ひ今朔金子の携出われむ。約のごく科を恵んか。汝速に陳ニ彫が

家に往て。棺椁を買へ来り。家小安臣百年の齢を経て。既に死去の時い。
我又幾ばくの銀を施して宮〻葬しめん。汝老人只心を安んじて這る
のことを憂ることなんを云。押司毎〻糸を恨ます上肯て待具が為
ねんと。恩生為ん報じ難うんん。一ツび死せば二ツび駒と生れると
う。押司の供恩を報ひ難ん。宋江云汝為ん慇懃のことを。彼
招文袋の内に金子ある。これ出さんとして。已にを以てとられを探られども。
招文袋ハ汝ふ着ざしを大江ふ預て去ひるへ。昨夜不男婆結ぐ床の側
の探杆の上ふ鈔を置るぐ。今朔忙し〻同じ。れ忘れて後ふ来らしよる。
其内の金子ハ盗れるとも。別憂なれか。晁蓋が方ふ来り書簡を入る
るぐ。第一の猫に我昨日酒楼を見を焼弄んと思ひ入る。劉唐り
山陣に飯て書簡を唐ふ焼捨しと若ば晁蓋が怒ん不も。いく

宋江怒て閻婆惜を刺殺す

わるくんと怒りて四五度罵れども燒火んと思ふの所。手途より不意に閻婆
に引き彼が家に往燒火用なく。こゝに及べり。我者に婆惜を着に初め初
曲のかを讀るが宜て嬢なくの文字を識こゝん。乃渠に着らく。こゝ
あらば勿論大事を惹出すべきなる。為ふ之協て是を知んと欲し。乃且公
ふ對して云るハ汝必ず我を憎むことなれ。我今朔旦しく出るを彼
金を入し袋を忘れて家の内ふ置ぬり。我今是を知く。少刻歸るべき
乃宜しく此ふ立て我を待んや。主公が云。押司何ぞ必しも。今日ふ限る
べきや。明日ふても明後日ふても。慢々と湯るべし。第武事のまるべ必す今
之協りぬふとなれ。宋江云別ふ又肝要の物を入置ぬ我今之協て。
急ぎ歸べと忙しく別れて歸び閻婆が宅ふ為ざるり。扨彼閻婆惜ハ
宋江が為しを受て。爬起独云に宋江を罵て云るハ彼宋江村吏我を

妨げて終夜睡しめざることを。挺憾れとも。我一向罵て不易探杆の上
を着れも彼招文袋を忘れて掛命ぶ。婆惜冷笑て云るハ宋江今朔
我に羞辱られ忙しく逃回りるが果して招文袋を忘れるとなる。これ
奇ひふ是を採て。強に送るべきふと怒んで。遂に招文袋と壓衣刀とを
とれと見るに。あゝ幸しとぶ必定恨めゝんとて。急に是を揮ひるよ。
果して一包の金子と一通の書簡とを揮出しれば婆惜呵らし歩嘆て。ひ
るハ天是を我に為ゝ。明日ふく汚食を調へ強に歌待。偖に娘を
使さんものと且金を收め。又書簡を披て。跳の下ふられとなるに。そ上に
見蓋ぶ名判を玄死し。許多の事を詳に述らしぶ婆惜大ふ怒び這根
の大事我を小落て是我を強に奠太の禍。我先ハ只弔桶の
井の内に落ることを思ひしに豈知んや。井却て弔桶の内に落る

る我れに張三と夫婦になんとと難くよとゝ宋江に立ち出で武郎と
と逐ずして第千兵と戻るに今日武書簡我を不義入るを見乃ち
井の弔桶の内に落るゝに稀有の孫事と宋江汝ハ原来大丈夫の
誉めるとこを喫るに。推ん識かくのごとく深山泊の強盗らと通はして。
書簡の往来をなるゝ書簡の内ハ百両の金子を以て汝ハ送るゝと
あるれば我れ金子をも乞取て張三と娼と偕さんとして再び金子と書
簡とを招文袋の内に入て自ら天ハ怪び地ハ表びるゝ

○宋江怒て閻婆惜と殺す

斯る所に忽ち閻婆ゝ来ふ門を開き入ハ推ゝるを宋江再び驚ゝ。閻
婆ゝ云我先に尚を早くんハ夜明て同ゝ出ゝと云れた押込れと
密ひ出ざしゝ果しく同ゝ来りゝ且樓ハ上て婆惜と偕に歌ゝ歌

明んゝ時よく飯りゝ。代ゝ宋江ハ出ちに樓を登りれば。婆惜ハ宋江が
再び来しを怒ゝ知るゝ由ゝ。宋に彼招文袋を。懐中に花し入て自ら
牢くこれを懐故云熟く睡る紛ハ詐ハ詐ハしる紛に宋江已に房局
の表に進ゝ来て。先床の前の探杆を見るに。招文袋ハ無ゝ。宋江
心中に云驚ゝ自ら吸歎の情りを思ひて。彼婆惜を推動して云るハ。汝
り旧日の恩を思ひ出して彼招文袋を我ハ還さ。我涙くこれを感ん
すべし。婆惜詐て熟睡の紛ふりをし。又に一云の答もせず。宋江又も推
揺して云。汝ハ由ゝ再ゝ我を怒る。我明日より汝を揺ハ敬ふへゝ
に。耳ゝく迷に怒を息んや。婆惜ハ初て眠を醒しる紛て云るハ。これ
甘く睡る居る所。我を推起すハ。推なるゝ。宋江ハ云。汝已に我又来し
と知ゝ紛ハ偽の紛ハ偽の事を。然くハ汝怒ゝを息て。我云ゝを聞んや。婆

惜哉て汝伊の云ことあそ奇りに我と妨るや。宋江が云。汝ハ[illegible]拓文袋と我
小還さんや。婆惜が云汝何れの所うそ。我よ拓文袋を交與して見せ雪
や。我者てこれと知るに。汝幸ホの幸と宮ふとなれ宋江が云我先ホ汝
が床の前の棕杆の上に架置るを忘れて問りぬ此所ホハ別ホ来る人も
ふなれば汝見せれずんば推ら見と取んや。婆惜が云。汝ハ見狸ら狐ホ迷惑
えんに疑なし。何とかくのごとく實の言掛とるとや。宋江が云汝歩りに
抵抗んより。速ホ我ホ還せ。我明日を初として。仏事も汝が心ホ隨ふべき
ぞ。汝再三戯れとすて。我を焦らしむることなれ。婆惜が云。我汝と戯
れて何の奥ろわるん。我ハ者て一物も捨ハざるに。汝迷に他所に住てこれと
同ハ第一又ゆるとやわるんに。汝此事の所に出居ることなれ。宋江が云
汝先ほ衣とも脱ずして外るが。今ハ見被と蓋て所ゆるに汝再び

起て此被と運入るホハ疑ひなし。もは必定彼拓文袋と拾れしなん。
何と一向に抵抗や。婆惜が云と笑て大ホ怒り。忽ち柳眉を踢竪て眼
を睜開て云るハ我実に拓文袋と拾ひ取る。決してこれと還すまじ
きに。汝能我と挺へて友府に絨情と企んや。宋江が云我いんで汝と捉へて
絨とてんや。必誤て我ムと疑ふとなれ。婆惜が笑て云るハ。汝も又能我い
絨なしぐらと知ることを奇特なれ。宋江一云と笑て。ますます慌張て云るハ。
我者に汝母子五人と觀て稀ホも親切なりとなるに。汝ハ何の所
我と絨るや。彼ハ平生の情と省て。拓文袋と還さんや。婆惜が云。汝者ホ云
我と張こしハ事なりと。実正と着面んと欲する心源し。もこ[illegible]ひ一
点の間なりとも未ざ死罪ホ変すまじ。刎汝が被盗絨ホと通用する罪より
ハ於大ひに軽しん。宋江が云雖て云汝必ず好と云るひとなれ。男儕の

人見て笑ひ事終に敗れん。只冥々く効を低くせよ。婆惜が云ふ。第一人の
笑ひを恐るゝは遠祖の大罪ハ犯もまゝ〳〵我彼書簡を牢く藏し
置れた汝より我小三の事を准へなば。我出芳を還し遣さん。宋江が云ふ
の事ハ扱置て三十の事ゝ雖も扱て我准ん汝迚ふ事まを考よ。婆惜が云
汝只恐〳〵ハ准へ難〳〵ん。宋江が云ふる事ハ紀〳〵ざれども我まゝに成べき
事なれば即行ん。何ぞ嫌ひの先疑ふや。汝宜くまくよ世。婆惜が云第一のこと。
我今日より彼張三小嫁すとも汝一云ふまゝきこと云文書を作て我が与へんや。
宋江が云見最易し。我これを准へん。婆惜が云第二の事ハ我彼張三に嫁し
ゝとも衣食使用ハ扱て汝見を余すべきこと云文書を作て我が与へんや。
宋江が云見又易し。我見を准へん。婆惜又云ふ〳〵ハ第三の事准へがたかん。
宋江が云我已に三の事を准へり何ぞ第三の事を准へざらんや。婆惜が云汝

孫准へんとなれば。彼晁蓋が送りし一百兩の金子をまく我が与へよ。然らば
我汝を饒して招文袋を還し与へん。宋江が云彼二つの事ハ准んが。
代一つの事ハ難く准がたし。もしいんでるれば彼百兩の金子を我が送り
うとも我再三見を辞し。対とも再ハ。山寨に還しぬ。しかも金子我が与ふ
べ。迚汝が与へんべ。雖て代金子我が与ふ。婆惜が云汝
ぞや。公人張が見てハ。蠅子の血を見るがゆゑ云とを。彼汝に百兩の金子
を送りに汝見を受ずして還すべさや。這笠の言ハ只好三寨の孩子戯
べ。汝何ぞ百兩の金子を惜むや。第三の事の紀れが為て汝が一命を殺さ
る。何ぞ必ず後悔まるとめ〳〵ん。宋江が云汝も考よ。我は考く
流と云ふ。汝が一生せずんば我が三日を限れ。三日の内に郭紀
変奏〳〵百兩の金子を汝が与へんべきぞ。汝先招文袋を我が還せ。婆惜

冷笑て云る汝一人聰明の人うそ。他人は皆癡呆なると思ふか。汝我を欺
ひて招文袋を求んと欲すとも。我何で汝に欺されん汝三日内に百姓の
金子を調へて我に与へんと云ハ。大ひなる偽く。汝もし招文袋を求ハ。
速く金子を持来し招文袋と取換せ。宋江が云我実に式金を。何で
汝と組ふさんや。婆惜が云。汝明日知縣相公の廳上へ出て。尚抵賴て式金を
と云へ。宋江ハ未だ怒をるべしとも。婆惜今知縣相公の廳上と云を
聞て忽ち大に怒り。眉を逆立て眼を睜家さ云ハ汝実に還さんや。又還すまじさ。
婆惜が云汝何と怒るぞや。我汝に式金を如何為招文袋を求ハ。鄆城縣知縣相公
の命ふ出よ。我彼和尚と汝ふ還すべし。宋江是を聞て大ふ怒り。彼が被る衣
襟を扯開て。胸を露ハ彼招文袋ハ系女が懷中に在しを見る。婆

惜ハ兵双手を伸し胸の上を緊と抱て衣襟の内を捜さを顧ぎしを。
宋江これを知て云ハ招文袋ハ汝が懷中ふ在し。速に出て
還さんやとて。忙ハしく向ひ倚て婆惜がを扯離して。これを棄ひ捨んとし
れを婆惜は一命を掛て。これを奪ハ棄ハ棄れじと働く。宋江又死を拒く。
これを奪ハんと互に推つ倒されつ揉合る紛に彼壓衣刀まで懷中ら
落しを宋江乃壓衣刀を取て手ふ持れば婆惜これを奪て忽ち刺さを
揚宋江を殺して。未だ怒ハ罷ざるに。宋江ハ刺さを受て怒ハ益て婆惜を
殺ハんと思ふ去を知て婆惜又第二刺を喰ハれて宋江ハ倒れ。宋江ハ倒れを思ひず。
尤の手を以て婆惜が胸を壓へ右の手に壓衣刀を持て。遂に婆惜が頸の上
を一刀刺ハれば。鮮血滾流れ。婆分紅に染ハれども。婆惜いまだ息絶ずして。
刺を揚て喊んとしれば宋江ハ力を。婆惜が首を只一刀に斬て遂に

新編水滸畫傳卷之十九
閻老婆
唐牛児と鬪諍の
間小宋江忽ち
脫去
新編水滸畫傳卷之十九
十三
十四

拓文袋とりて。彼書笈を焼の下うて火中。壺ちの樓をうつて。ずいるる紙に。彼
閻婆の八女が今人を殺すと。呼りうる。夢て実に何事を做出るるやと。
忙しく起て。地面より乃ち梯子の上うて。宋江に撞着しらば。閻婆さん問く
云。汝女人竟夜何事を。爭ひぬるぞ。宋江云。汝が女子。ふ孔なるを依
て。我彼を殺しぬ。閻婆笑て。押司は実に一寸の虫ぞ。殺しぬ人を。
いんぞ肯て人を殺しぬんや。必戯れを云ふ。宋江云。我実に婆情
を殺しぬ。汝ぞ。これを信ぜずば。樓の房局ふ入て屍首を見よ。閻婆云。我
尚信じ。とて。遂に房局の戸を推開きこれを見る。鮮血の内に屍首
あり。閻婆大ふ驚て云。若しや。見を如何せん。宋江云。我いられ。大丈夫
これを決して逃ることせば。いかにも汝が心の欲する所に従ん。閻婆云。我女
を殺押司のふ背き。とも。多し。押司を殺しぬ。

只恨らくは我晩年に及で一人の女ふ別れしを。今より誰を頼て我を養ふべき。
宋江云。事の憂ふ。汝の我を饒さん。我者食物財宝を
送て。汝を養育し。実に汝が心いんぞ。閻婆云。果して。かくの
ごとくに我を養育されを感じ。屍首を葬ふべきに。押司これを
拒ふ。ひ。宋江云。是易し。我陳三郎が家。棺椁を買て。汝ふ与
へん。汝先角の屍首を棺椁に收よ。式の如く又十数の銀を送べ。閻婆事
の使用に供て。葬ふ屍首を葬ふ。閻婆云。押司肯てかくのごとくなる
ば。屍首を葬さんと。易るべし。宜しく夜の明ざる間に棺椁を買て。屍
首を收べ。方の近傍。屍首を見る人なく。事いかんぞ。宋江云。汝
云ふて。彼。汝疾紙筆を拿れ。我書簡を作て。汝を陳三郎が方ふ送て。
棺椁を賜しめん。閻婆いとく。書笈を撞ぬ。必定事延ふ。

ねんごろ
懇くハ押司自ら任ありひろく棺椁を元来の人宋江ガ云汝ガ言不尤千理
あり我今汝と倶に行べくれど牢くに門を実せそ遂に樓をとり門外ハ出
られハ閻婆自らつと実しく友人縣花を呑んで弛る紙に此時天色未
明うて街の人家未ダ起さりし先縣門ハ已に開いたり

○閻婆大ハ鄆城縣を開いむ

宋押司ハ閻婆と倶に縣門の花に到りしに閻婆俄ハ宋江を牢く揪へ
人を殺害したる紙うに立と呼れど宋江大ハ驚て急に閻婆ガ口を掩んと
すと既を搖て掩しめど又一連に三三数人ばかりしかば縣花に立合ハ下友ら数人
弛来て先を着れど宋江ハしばらく下友皆閻婆を劫めて汝に安よ宋押司
人を害る人物にあらず汝為事めくべ静にうれと云よ閻婆ガ云宋江ハ
実に人殺しの兇犯人別位我ガ為に此を捉へ我と倶ハ縣相公に伝く

ありし以ハ不来宋江の人とあり究て仁義うれば官軍上下悉く敬して海縣の
人宋江を懐ガ一人もなれ九氏時下友ら劫て宋江を捉を知て共逃さん
と欲しるる紙に忽ち彼唐牛児糟姜を撞て氏不に来りるが閻婆ガ宋江
を捉へ共顧闘ぐと着く怒めく。織老婆既我を去るガ今朝ハ汝ま
宋押司を捉て苦むるを忽ち憾く我今氏紙に於て既数の間ま之ガ
んべ文ふ行れの時を待べしそ乃ち糟薑を茶麦の老王公ガ麦の上に卸し
妄忽ち飛ぐくに跑来て大ひに罵て云るハ織老婆ハ汝何ぞ。押司を捉へ苦
まめまるすや閻婆ガ云汝必ず卒ふに来て宋江を逃をとうれ乃逃さば
汝ガ命を我ふ償ふべさそ唐牛児ハ茶後の事を知ざ已ハ云を受て大ふ
怒り何ぞ我ガ命を汝に償んやとて彼閻婆ガ面を知て痛く拆さ拳を揑
て閻婆ガ面を殴ぐに於る紙に閻婆大ひに苦で遂に涙を放ちけれど

宋江ハ石秀ヲ閻婆惜ヲ脫れ出て。遂に逃去ぬ。閻婆惜に唐牛兒を撲へて。哭呼て云るハ。宋江ハ此我娘を殺しに汝ハ何の故に彼を逃しやるや。唐牛兒是を聞て。急ぎ我を紐て逃しやるとおもふ。閻婆又彼ト爭らに向て大ふ呼つて云引住我ゐに人を殺しやる。城宋江を捉てゝ呼ハ。

宋江ハ。閻婆惜ハ累列信ふ乃ぶ。下友ハ來て。宋江が情を篤し。者たれば殺て宋江を追求んとするハ一人も無しゝ。下友を人閻婆を引。彼の下友ハ殺て皆唐牛兒を捕へて。遂に鄆城縣へ引渡しぬ。知縣ハ人を殺しゝることを聞て。忙しく廳上に出る。文に法の軍卒ら。唐牛兒を堦の下に引出す。知縣ハ。

ゝる。一人の老婆ハ。の方ふ跪つく。又一人の漢子右の方に低頭す。知縣ハ問て云人を殺しゝるハいかゝ。彼老婆ハ。

女を持ぬ石を閻婆惜ゝ。宋公明の妾なりし。此秋女宋江を捉に樓上に泊を砌。娼で居しし。知に武唐牛兒を。ふ我家に至て大ふ鬧し。我を罵

知口秋しぬ。左右の近隣。盡く知ぬ。今朝宋江已に同りるが。何

知ゝ。秋て又來て女閻婆惜を殺に。此ハ我宋公を扯く。縣

帝ふ。知に。又武唐牛兒を。檀に我を打罵り。是に宋江を放逃

しぬ。孤くハ相公明ゝに是を。縣これを聞て乃ち唐牛

兒ふ向て。汝何ぞ人を殺しゝる。先身を放逃せしや。唐牛兒答て云る

ハ。素ゝ是て。前後の緣故ハ。知ゝ。縣ハ。秋不ゝ宋押司を。ふに武老婆

家ふ。乃ち宋江に相伴して。酒を。殆んとせし。知に武老婆何の故も

なく。ありに素を羞辱。剝へ拳を。痛く打れた。素是を。怨て回れり。

今朝素又街ふ出て。糟薑を貫て。張る知に武老婆宋押司を。捉へて。縣

弟ふかりに顧爭とすて雨しきに故系站停てこれを勸免るに宋江自ら走り近去てひ系毛張宋押司彼ら女を殺されるとを望らくハ相公是を聞知縣大に怒て云汝ひのこく胡亂の云をいふや宋江ハ是信行の習ひいんぞ人を殺さんや閻婆惜を害しるハ必定汝なるべし。遂に左右に命じて唐牛兒を縛らうとす赤に張文遠来て宋江が閻婆惜を殺しるを聞心中ひ懷り乃閻老婆が一函の狀子を偽へ遂に知縣に告て死人閻婆惜が屍を點檢べしと願ひ許し刑司池の里正及び許作ホを閻老婆が家に遣しに彼屍を點檢る如に死人の傍に一挺の壓衣刀あり里正先ず壓衣刀を拾ひ彼閻婆惜が殺されるかの痕ホ人ひく是を見屏乃死人を棺椁に納めて近辺の寺中に寄る。流人再び縣裏に問て點檢る照依詳に所へり知縣ハ原来宋江と

元親しきを思ひ出て宋江を救ふと欲し乃跟て唐牛兒を捉に推干け再三唐牛兒を怒り罵て白狀せよと問ふに唐牛兒ハ云系ふて後の事を知ひ故ハ相公幸ひさを罪しまふて知縣が云汝ハ中に閻老婆が家を問しるハ私の寃ある故に婆婦を殺しるハ必定汝なるべし唐牛兒が云系ハ後彼が家に行て宋押司を窺ひしハ実に一盗の為を求んとす豈私の寃あて行ふをんや。是を信じ知縣ハ彼老婆に問を勸棒を加て云ふ知縣が云いんぞ白状せ我今痛く汝を拷問せん必悔るとを云ふ。知縣が云いんぞ白状せ我今痛く汝を拷問せん必悔るとを云ふ。遂に左右に命じ策せ。恰も虎狼の如き下友忽ち唐牛兒を拉倒し痛く五十余棒打ける所に唐牛兒終に放て喊しが手に言ハ初ヤ所おも差ざり知縣いえ来唐牛兒ハ閻婆が女を殺せしにあらざるハ老早明ふ知るとを只一味に宋江を救ふんるこの唐牛兒を拷問せり知縣先ず左右を

ゆで彼が頭枷を枷せられ。彼張文遠廳に上り。乃知縣に告てまうさへ。唐牛兒が所始終如何。況や閻婆惜を殺したる壓衣刀ふて。門傍の者これを識認る者多し。宋江を尋ぬる。秘義の壓衣刀ふて。門傍の者これを識認る者多し。

那くハ先宋江を捕へて。問ふべし。張文遠が知縣ハ源く宋江を仰けんと欲せしかども。張文遠が再三再四諫へらるゝ。今ハ已に人の耳目遠く掩ふと雖ども。遂に下吏に命じて宋江を捕へしむ。下吏ら命を蒙り。直に宋江が居宅に到て。搜しかるに宋江いまや逃去る。家内に立ざりれハ。下吏ら商議して云ふ。我等ら。宋江を捕へして。問ふべし。閻婆の等數人を。拘て。ゆるべしとて。閻婆數等を擒て。遂に知縣の廳前に引出し。乃知縣に告て云ふハ。先ず宋江ハ已に家を棄て逃去る故。閻婆の數等を捉へ。問て。時張文遠知縣に向て。縱ひ宋江逃失ふ。彼が父宋公をゝびに。

宋清ハ宋家村に居住して。寄ふ。彼を捕へ。百數を懲ら。乃下吏に。彼を仰て宋江を尋ぬ。今般宋江を捕へ。ゆるべ。

と見て。詳ふん

新編水滸畫傳卷之拾九畢